そのふたつの瞳がまっすぐに見つめるものは・・・!?
映像クリエーター・新海誠氏（『ほしのこえ』監督）も推薦！
話題のSFファンタジー、第1巻から第4巻まで好評発売中！

柳沼行先生インタビュー

読み切りでのデビュー時から現在連載中の『ふたつのスピカ』を通じて、少年・少女が持つ純粋で無垢な感情の変化を描くその独特の表現で、専門店はじめ様々な編集部からも注目を集める柳沼行先生。
今回のインタビューではその柳沼先生に『スピカ』連載までのお話しはもちろん、その漫画感など気になるお話しをたくさん聞いてきました。
編集前にいつもの倍の文字数にもなってしまった程の内容の濃いインタビュー、ぜひご一読下さい！

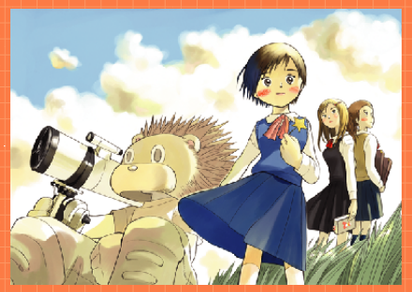
『ふたつのスピカ』 柳沼行
「コミックフラッパー」（メディアファクトリー・毎月5日発売）連載中
コミックス第1巻～第4巻発売中

『ふたつのスピカ』に関する最新情報はココでチェック！
＜コミックフラッパー 公式HP＞
http://www.comic-flapper.com/index.html

●「ふたつのスピカ」キャラ紹介●

鴨川アスミ（中央）
本作品の主人公。獅子号事故により幼いころから母を亡くすも、『ライオンさん』との出会いにより、ロケットの運転手（宇宙飛行士）を目指すようになる。高校生にも関わらず、身長143cmの小柄な体型だが、人一倍の努力でそれをカバーし、ライオンさんと一緒に宇宙を目指す。！

ライオンさん（左）
少年の頃からの夢を叶えるため、念願の獅子号パイロットになるも、事故により死んでしまい幽霊となる。自分を見ることが出来る唯一の存在であるアスミを子供の頃から支えてきた心優しき彼だが、その将来は果たして・・・?



宇喜多万里香（後方左）
アスミと同級生の美少女。他人との関わりを否定する彼女だったが、アスミの宇宙に、そして自分に対する純粋な思いにその態度を砕いていく。何故彼女は宇宙を目指すのか、そしてライオンさんの記憶に残る美少女との接点は・・・?

近江圭（後方右）
アームストロングの月面写真に憧れ、宇宙を目指す彼女。入学テストでアスミと出会って以来、その優しさと純粋な思いに惹かれ、彼女の良き理解者として行動していく。その裏表のない行動はアスミの心の支えとして、欠かせないものとなっている。

■『ふたつのスピカ』作品解説■

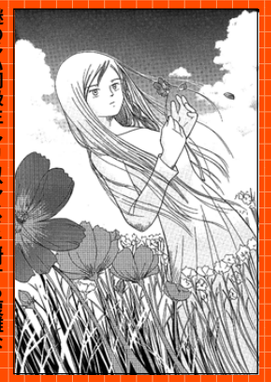
西暦2010年、日本初の有人ロケット『獅子号』墜落事故により、母を失ったアスミは、その獅子号のパイロットだった幽霊『ライオンさん』と出会いから、ロケットの運転手（宇宙飛行士）を目指すようになる。
肉体的なハンデ、父との別離、同じ志を持つ友との出会い、獅子号事故の残した傷跡、そして懐かしい彼の面影。決して平坦ではない道だけど、今日もアスミはライオンさんと一緒に目指す宇宙に向かってまっすぐに歩いていく。
表題作『ふたつのスピカ』はもちろん、各巻に収録されている読み切り『アスミ』シリーズも含め、心動かされること間違いナシの本作、ぜひ読んでみてください！

「ロケットの運転手になります!!」

アスミとライオンさん、二人の見つめる先は?

ライオンさんを描くきっかけとなったこのシーン、コミックスでぜひ!※

様々なヒトに残った傷跡、獅子号墜落事故とは一体・・・?



謎の多い同級生・マリカ、アスミに対する複雑なその想いとは?※

アスミの前に現れた少年、その面影がアスミに与えるものは?

あきらめない気持ち、彼らの想いはあの空に届くのか!?

※の付いたページはコミックスでは見開きページです。ぜひコミックスでご確認下さい。

編集：まずこの『ふたつのスピカ』を描く事になったきっかけを教えてください。

柳沼先生：フラッパーで描くきっかけになったのが投稿だったんですけど、実は賞には漏れたんです。
でも最初に担当になってくれた方が、落ちたにも関わらず、すごく熱心に色々とサポートをしてくれて、読み切りを描くことになったんです。
だけど実際に30ページもの長編というものをこれまで描いたことがなかったんです。それでどうしようかなぁって思ったときに、昔から友達の同人誌とかに、2, 3ページで描いていた短編を膨らませてみようということで、最初の読み切り（『2015年の打ち上げ花火』・『巻収録）を描いてみたんです。

投稿した作品も今の作品と似ているんですか？

投稿した作品はもっと普通の話でしたね、青年誌によくある人と人との恋愛みたいな・・・、そんな感じの作品です。
でも編集部からそういった作品じゃなくて、もっと違った作品、SFでも何でも良かったんですけど、少し宙に浮いた作品を描いて欲しいって言われたんです。
それで、じゃあ、普通の話は描けないな」と思って、実はSFとかファンタジーとかに苦手意識があったんですけど、さっきも話しました同人誌に宇宙や幽霊をテーマに頼まれて描いたのがあったんで、それらの要素を組み合わせて作ったのが『昨日の読み切りだったんです。

じゃあ、宇宙や宇宙飛行士ものというテーマは以前から暖めていたわけではなかったんですね。

本当に申し訳ないんですけど、そうなんですよ。
だからそういった期待というか、『宇宙とかすごく好きなんだろうな』といったような想像をされている方が多いらしくて、すごくがっかりされたこともあるんですよ（笑）。
実際に宇宙の設定が決まったのは、2本目の読み切りの打ち合わせの時でした。
その時点ではこの読み切りがこうした連作の形になると決まっていなかったんですけど、『この作品が連載になったときに誰が主人公になるの？』って聞かれて、この女の子、アスミが、宇宙飛行士を目指すみたいなことを、あまり考えずに言ったら、それが担当さんに響いたらしく『じゃあ、連載できるように頑張っていこう』ということになったのがきっかけです。

タイトルに『スピカ』を選んだのはどうしてですか？

殆ど後付けになっちゃうんですけど、獅子座の後を追いかける星座に乙女座があって、そこのα星がスピカなんです。それでライオンさんの後を追っかけている女の子というイメージと重なるんで、いいなって思って付けました。

作品を作る上で影響を受けた作品ってありますか？

影響を受けたもの……。繋がっているのかどうかわからないんですが、岩井俊二さんの作品には影響を受けたかもしれないです。
大学生の時、深夜ドラマで『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』を見たんですけど、見終わった後、朝まで眠れなかったんです。
もうあまりにも良すぎて、自分の中で『この世界を表現したい』という気持ちがいっぱいになったんです。その頃は漫画もそんなに描いていなかったんですけど、何らかの形でその世界観を表現できたらいいなって思いました。
だから『昨日の』『2015年の打ち上げ花火』のタイトルには、岩井さんへのリスペクトの意味も入っています。
あと色々な作品を見ていて思うのは、やっぱり『少年期』を描いている作品にはグッと来るものがあるんですよ。だから子供の話を描いていきたいですね、初恋とか子供時代にしか有り得ないキラキラした部分とか。

初連載ですけど、なにか執筆活動で変化はありましたか？

今迄経験がなかったんで、特にないです。あまり考えないで描いています（笑）。
はじめはいつ打ち切られてもいいように（笑）、毎回一話読み切りみたいな形で描いていこうとしたんですけど、やっぱり難しかったですね。
だから今は後先考えずにこの連載を大きな読み切りだと思って、『最終回にこんなことを描きたい』というゴールだけを設定して、そこまでの伏線をずっと描いていけばいいかなって思っています。

最終回に描きたいものというのは、連載当初から変わっていないんですか？

変わっていないです。

僕の場合、テーマとかじゃなくて、『こんなシーンを描きたい』といった感じで話を描き始めるんです。
だから見せたいシーンや、言わせたいセリフが出てきたら、それが描けるように『ムリヤリ』話を繋げていく」といった描き方をしているんですけど、以前は先頭から順番でいって、『ロレが描けたら終わり』って感じだったのが、こうしてプロとして描くようになってからは、まず描きたいものを最後に持ってくるように考えて、そこから逆算するようになりました。

連載ではキャラクターが増えたり、学校とか世界が拡がりましたよね。そのあたりはどうですか？

そうですね、ページ数が決まっているんで、そこに全部描ききれないときがあるのが辛いですね。
僕としては群像劇、ドラマの『ふぞろいの林檎たち』や『白線流し』のような青春群像みたいな、それぞれのキャラが悩みを持って、独立したキャラを持っているものを描きたかったんです。
だけどそれだと人数が増えすぎてまとまらない可能性があるから、もう少しアスミを中心にした2～3人ぐらいの仲間というか、アスミを起たせる存在として描いてみる方法も考えてみたり、そのあたりの設定は色々と悩みました。
実際、僕自身アスミは一番好きなキャラなんですけど、『アスミだけ』という感じじゃないんです。どっちかと言うと僕としてはアスミが成長するという話よりも、アスミが周りに与えていくという話にしたかったんですよ。
周りの友達の持つ悩みとか、そういったものに何かを与えていくというか。

作家さんの中には、すごい個性があるキャラクターが浮かんで、そのキャラクターを描きたくて、物語を作る方がいらっしゃいますが、それとは違いますね。

キャラクターありきじゃないですね。
僕はどっちかというとそこにいる全員の雰囲気を大切にしちゃうんですよ。だから読んでいて、それぞれがぼんやりしちゃうことがあるかもしれないですけど、こういうキャラクターを描きたいというのはないです。
自分の趣味になっちゃうんですけど、雰囲気というか空気、そのアスミ達の後ろにある背景、例えばそこに単純に桜が咲いていたりしている様子、そういったものが描きたいんですよ。
正直、色々と批判があるかもしれないんですけど、僕が描けるのはこうした世界だけなんで。

連載を続けていくなかで、変化していったものとかありますか、例えばキャラクターの性格とか。

そうですね、キャラクターで言えば僕は基本的に悪いヒトが嫌いなんで、出来るだけ出したくないんですけど、連載を続けていく中で、編集さんからアスミをいじめるような悪いキャラクターを出してみてはどうかって提案されたんです。
いわゆる『ドラマを起こす』ためなんですけど、それであの先生を登場させたんです。だけどダメでしたね、どうしても丸くなってしまうというか、やっぱり描ききれないんですよ。
編集さんもそれを感じてくれたんで、どっちにするか相談したんです。このままアスミをいじめさせるか、フェードアウトさせるか、それでフェードアウトさせることにしたんです。
実際、悪いヒトどころか悪い顔も描けないんです。描いても描いてもみんな丸くなっちゃうんで、そういう性格のキャラについてはあきらめちゃったところもありますね。もし性格を悪くするにしても、本当に悪いままはイヤなんで、なにか安心できる根拠、悪くなった理由を入れますね。
マリカについても本当はもっと性格がキツイはずだったんですけど、彼女もやっぱり丸くなっちゃいましたね。

キャラクター設定についてですが、どうしてライオンを登場させたんですか？

ライオンはですね、最初に浮かんだイメージがライオンが立て髪をなびかせて階段の上に立っているというイメージがなんの脈絡もナシに浮かんだんですよ。
最初の読み切りのときがそうなんですけど、そのイメージの中にドカン、ドカンと花火が浮かんでたらいいなって思ったのがきっかけです。
でもライオンがいきなり立っているのもどうかなって思ったんで、そこに昔の幽霊ネタを繋げてみたんです。
あまり理由付けはないんですよ、いつもイメージとして突発的に浮かんだものを後から形にしている感じなんです。
あとアスミに関して言えば、いまっぽくしたくなかったんです。元気があるというか、ハキハキした如何にも『主人公です』みたいな感じではなく抑えた感じにしようとしました。

それはキャラクターの動きで雰囲気を壊したくないからですか？

う～ん…、雰囲気だけなんですよ、僕の作品って。大事にしているのはそこにある雰囲気で、全部抽象的になっちゃうんですけど、具体的にどうこうって浮かんでこなくて、アタマのイメージだけで描いちゃうんですよ。

アスミだけがライオンを見える設定にしたのはどうしてですか？

恥ずかしい話なんですけど、もし僕が子供を産んだら、こんな形がいいなと思う理想の関係なんです。
実は以前付き合っていた女の子に話したことがあるんですけど、僕の理想の親子は一人娘がいて、父親がいて、母親は早く死んでいるんだ」って言ったら、もの凄くなじられました（笑）。

そうでしょうね（笑）。やっぱり子供は成長していきますけど、根っこの部分は無垢のままでいて欲しい感じですか？

そうですね。今だと無垢や純粋であることってすごい恥ずかしいことのように言われますけど、僕は『純粋でいいじゃん』って、強調したいんですよ。正直気恥ずかしい部分であるんですけど、でも逆にそれを押していきたいなっていう考えもあって、恥ずかしいけどそういう部分って失いたくないというか、親子の労りあいとか、自分に置き換えるとすごい恥ずかしいんですけど、せめて漫画の中では忘れずにいたいんです。
最近漫画でも妙にリアルな、辛い現実とかが描写されている漫画ってありますけど、そもそれって現実で充分じゃないかって思うんですよ。やっぱり漫画の中ぐらいは優しい世界があっても良いと思うんです。

すごく良く分かります、やっぱりせっかく読むんだから、幸せな気持ち、楽しい気持ちにして欲しいですね。

確かに優しいだけだと、すごく甘っちょろい世界だけになっちゃうとは思うんですけど、そういう世界というかそんな作品があっても良いと思うんです。やっぱり生きていると辛いこととか、辛いことばかがいっぱいあって、現実逃避みたいな言い方になっちゃいますけど、『せめて漫画ぐらいは』ですね。

見開きの使い方が効果的ですよね。それはかなり意識しているんですか？

そうですね、そこはかなり意識しているんですけど、元々ページ数の多い漫画って描いたことがなかったんで、最初に描くときに30ページなら最後の方の26、27ページ目は見開きにするって、自分で決めちゃったんですよ。見開きでドカーンと盛り上げたとき、残り2, 3ページを余韻にすると収まりがいいなって思ったんです。あと『チャンチャン』という感じでは終わらせたくなかったというのがありますね。
やっぱり余韻ってすごく大切だと思いますし、実際こうしたフェードアウトみたいな感じは自分にあっていると思っています。

執筆活動以外でなにか変化ってありましたか？

実家で描いているんでなんにも変わらないですね（笑）。
ただ何も言わないけどやっぱり親は心配していると思いますよ、一生続くものだと思っていないでしょう。僕自身も一生続くものだと思っていなくて（笑）、どっちかというと山にこもって自分の創作活動をしたいという思いがあるんですよ。
大学の時に切り絵をやっていたんですけど、それが結構楽しくて、将来的にはそっちもやってみたいなって思っているんです。でもそれを口にすると、実は自分の中学からの友人で漫画家さんがいるんですけど、寝画家でいる以上、一生漫画家でやっていくんだという気概でやらなくちゃダメだ』って、よく怒られるんです（笑）。

同じ漫画家という友達がいることは何か違いますか？

いろんな意味で救われているところはありますね。
やっぱり彼がいるから安心して描けるというか、同じ悩みというか、大体僕がグチるんですけど、それをさらっと『気にしなくて良いよ』みたいなことを言ってくれたりするんで、すごく助かっています。

最後に読者へメッセージをお願いします。

よく『このまま変わらないでいて欲しい』と言われるんですが、それがどういう意味かよくわからないんですけど、多分この雰囲気を気に入っていただいていると思うんで、頑張って続けていければと思っています。
読んでいる人にすれば、色々言いたい事はあると思いますけど、特に奇をてらっているわけでもないですし、単純に僕が心地いい世界を描いているだけなんで、突っ込まないでくれると助かりますね（笑）。

取材日 平成15年6月4日 協力 コミックフラッパー編集部

©柳沼行／メディアファクトリー